（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	神代　ちひろ
論文題目	現代アフリカ農村における女性住民組織と生活実践 ―ブルキナファソ北西部の開発プロジェクトとマイクロファイナンスをめぐる事例から―		

（論文内容の要旨）

本論文は、開発プロジェクトの活動やマイクロファイナンスの利用が盛んにおこなわれている現代アフリカ農村において、女性住民組織の活動が、村びとの生活のなかでどのような役割を果たしているのかを、組織レベルと個人レベルの分析により明らかにしたものである。

第1章では、本研究の背景と目的を示した。開発プロジェクトの受け皿となる「住民組織」に関する先行研究では、開発プロジェクトの成果に関連づけ、組織単位でその活動を評価する傾向が強い。それに対し本研究では、組織の分析に加え、組織の会員個々人の生活実践から、組織活動や開発プロジェクトを分析する重要性を論じた。

第2章では、ブルキナファソ北西部の調査村と農耕民ブワについて概説した。調査村ではこれまで、海外等の複数の開発援助機関のプロジェクトが継続しておこなわれ、公共施設などが整備されてきたことを述べた。

第3章では、ブルキナファソとブワの住民組織の概要、ならびに調査村における住民組織の変遷と各組織の活動について分析した。調査村では伝統的な組織が存在し、村の生活や農作業を支えてきたことを指摘した。

第4章では、開発プロジェクトをきっかけに形成された女性住民組織「ハナーミ」の活動の変遷を詳述した。ハナーミは、複数のマイクロファイナンス機関からマイクロクレジット（少額の貸付金、以下クレジット）を借り入れただけでなく、会員の経済活動に適した返済期間や利子率で貸し付けるよう各機関に交渉し、条件を変更させた。また、ハナーミがそれらの経験を通じ、技術、知識、自信を蓄積し、外部組織に頼らない自己資金による独自の金融活動を創り出したことを明らかにした。

第5章では、クレジット利用について個人に焦点を当てて分析した。マイクロファイナンス機関は、女性の事業拡大や生活向上につなげることを意図して貸付をおこなう。しかしハナーミの会員は、生活必需品とはいえない家財道具や、本来なら夫が負担すべき消費材の購入にもクレジットを用いていた。彼女たちはそれにより精神的な充足を得たり、家計を安定させたりしていたことを指摘した。

第6章では、ハナーミの会員がおこなうクレジットの「又貸し」や、返済できないときに頼る相手に着目し、クレジットをめぐる社会関係を明らかにした。会員の又貸し相手は夫や息子などが多く、返済ができないときに頼る相手は、夫あるいはハナーミのクレジット利用経験者に限定されていた。ここでみられる又貸しは、男性親族に

「なにかをしてあげたい」という女性の想いを実現したり、夫婦で家計を支え合ったりする手段となっていることを論じた。

第7章では、ハナーミが複数の開発援助の資金を活用し、野菜作り用の菜園の設備を整えていった過程を示した。多くの会員が、非会員である女性親族に自分のプロット（作業場所）を貸し、井戸の水が不足する問題が起こった。それに対しハナーミは、会員の優先権を守りながらも、女性親族を受け入れるための新たなルールを作っていったことを明らかにした。

第8章では、個々の会員がハナーミの菜園をどのように利用しているのかを詳述した。菜園は女性たちにとって、おしゃべりや情報交換、手助けを通じて人間関係を醸成する場、野菜作りへのモチベーションを高め合う場となっていることを示した。

第9章（結論）では、ハナーミが、組織外部に対しては資源の獲得や交渉をおこなう役割、組織内部に対してはルールを作り資源を管理する役割を担い、開発援助機関が期待する主体的な組織活動を展開していたことを明らかにした。一方、会員個々人は外部機関の意図に反し、本来なら自分だけで利用すべき資源を親族に分けて利用していた。それにより相手とのゆるやかな互酬的関係さえ生まれていたことを指摘した。